

私はこんな風に使っています！

研究部 育種課

このコーナーでは、「自然農法の種子」を活用いただいている方々に焦点をあて、栽培や種子に対する思い、使用している自然農法品種についてご紹介します。

ユーザーのニーズを的確につかみ、さらにいろいろな環境でその品種の特性が発揮されるかを確認することは、品種を育成するうえでとても重要なことです。育種課では、品種を育てる過程で試験採種した種子を用いて提携農家や種子ユーザーの協力を得て、数年間の試作を行い、品種

の特徴をつかみ、より生命力が強く味の良い品種を育成しています。

第4回となる今回は、頒布当初からのユーザーであり、自然農法キュウリ品種の試作農家を長年務めてくださっている柴本無農薬菜園の代表柴本勤氏を訪ね、取り組み内容や栽培、種子に対する思いについて伺いました。

種子ユーザーはもう一人のブリーダー

30歳の時に脱サラし、地元長野県中野市で就農した柴本さんは、今年で30余年のベテラン。現在は畑を4ha所有し、そのうち20aを使って有機農業でキュウリの露地栽培をしています。作業は常時雇用者1名と研修生2名、袋詰め・荷造りに2名、

収穫時期に2名を雇い、農園の経営者としての顔を持っています。就農して5年目に有機農業研究会に入会し、当センターの研修会にも頻繁に参加して自然農法について勉強してきました。

柴本さんは当初、市販品種を使い、整枝や仕立て方法も慣行栽培のやり方を採り入れていました。その頃は、収穫開始から1ヶ月を過ぎると急速に樹の勢いが衰えてうどんこ病が発生し、収量がなかなか上がらないというのが問題でした。当センターのキュウリ育種担当者のアドバイスにより、根を張らせるために株間を120cmと広くして、仕立て方を無整枝にし、自然農法で育成したうどんこ病に強い試作品種の比較栽培を数年間行いました。その結果、絞ら

れてきた品種が「上高地」です。柴本さんは土づくりや樹勢を維持するための研究に熱心で、努力を積み重ねた結果、今ではうどんこ病、べと病を含め、病害は大きな問題にならなくなりました。そして安定して高収益が上がるようになり、キュウリが経営の柱となりました。

「上高地」のあとはさらなる味の良さを求め、「バテシラズ」「バテシラズ2号」や「イボ美人」「白黄ウリ」など新しいタイプの品種開発にも協力していただきました。7〜8年前からキュウリの褐斑病が問題視され始めたことから、育種課で耐病性育種を始めました。柴本さんの畑でも新しい品種の試作を続けてもらい、褐斑病に強い「バテシラズ3号」が生まりました。



柴本さん（左）と当センター品種育成者

柴本さんは長野県の里親制度を利用して研修生の受け入れもしています。詳しくは有機農業参入促進協議会ホームページ (<http://yuki-hajimeru.net>) をご覧ください。



生命力に溢れ、生育旺盛な柴本さんのキュウリ

通常、品種の試作は生育状況を重視しますが、柴本さんからは販売店や消費者の味に関する反応も知ることができ、新たな品種を育成するうえでとても参考になっています。育種課にとって、まさにもう一人のブリーダーのような存在です。

有機野菜の新たな可能性をめざして

就農当時は販売ルートをもっていなかったため、トラックに乗せて売り歩き、販路を獲得するのにずいぶん苦労したそうです。現在、生産した野菜は地元ではなく、おもに東京横浜などの大手デパートやスーパーマーケットなど首都圏に出荷しています。

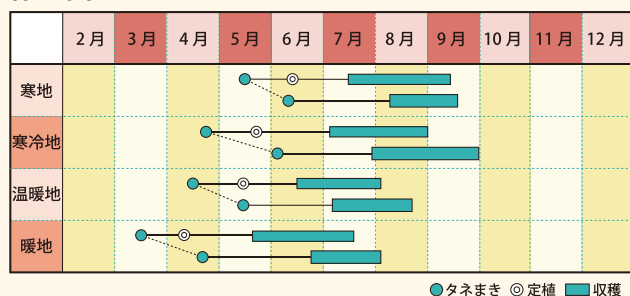
ご自身が販路開拓に苦労された経験から、就農を目指す若い人には、有機JAS認証の取得を勧めています。有機JASによってある一定のレベルだということが仕入れ業者の人にも理解され、販路がはつきりし、売りやすくなるという理由だそうです。今後、有機JAS認証では有機種苗が義務づけられる可能性があるため、当センターに期待を寄せています。

今号の紹介品種 キュウリ「バテシラズ3号」

暑さに強く、スタミナがあり長期間収穫できるキュウリです。早まきから遅まきまで幅広い作型に適しています。鮮緑色の実パリッとした食感でさわやかな風味が特徴です。褐斑病やうどんこ病、べと病に強く、アブラムシもつきにくいので作りやすい品種です。



作型図



柴本さんは味の良い野菜を育てるために土づくりが重要だと考え、元肥には廃菌床と自家製ボカシ（おから・米ぬか・もみ殻・アミノ酸・ミネラル等）を使用し、さらにミネラルやアミノ酸を定期的に葉面散布して味の良さを追求しています。

「本心は百姓として栽培を楽しみたいが、農家経営を成り立たせるにはコンスタントに収量をとり、生活を安定させる必要があるため、経営とのバランスを取ることも課題です」とおっしゃっていました。今後の展望として、日本の農業を豊かに

するためにアジア諸国に向けて有機野菜を加工して販売したり、健康志向の強い日本人にも手軽に有機野菜が食べられるよう、真空パックにして提供していきたいと夢を語っていました。

「日本全体の農業者人口は減っているが、有機野菜を求める人は着実に増えてきているので未来は明るいですよ」と、明るく屈託のない笑顔で有機農業の大きな夢を語っている柴本さんの姿は、経営者としてキラキラ輝いて見えました。

（原田 晃伸）